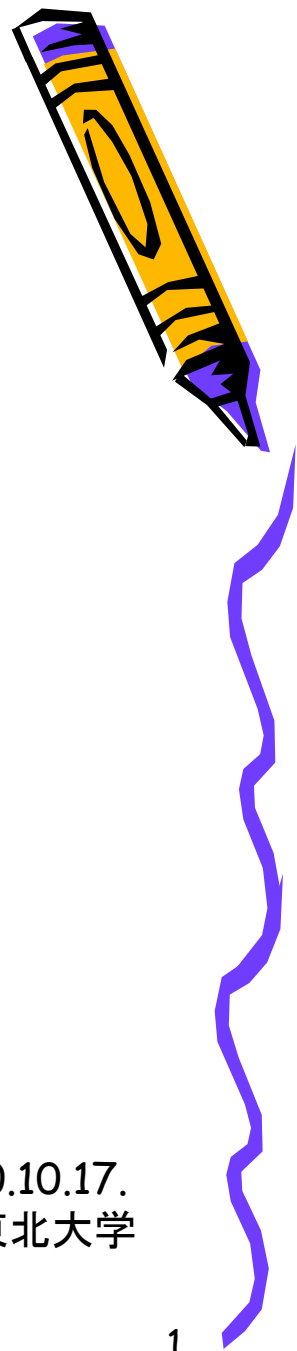


既婚女性の就業パターンと ワーク・ライフ・バランス

淑徳大学非常勤講師ほか
鈴木富美子

2010.10.17.
於：東北大学



1. はじめに

・ここ10年間、就業をめぐる状況は大きく変化

①非正規雇用率の拡大

1997→2007の推移(「平成19年就業構造基本調査」)

男性:11.1%→**19.9%**、女性:44.0%→**55.2%**

★特に、「35歳未満」の女性で大きく上昇

男性13.0%→**23.1%**、女性28.7%→**46.5%**



「労働市場の二極化」(樋口 2008、2009)

所得と労働時間

②「ワーク・ライフ・バランス論」の登場と広がり

最近では対象を男性や独身者にも広げつつある。

BUT この2つの流れの折り合いの悪さはなぜか？

- ・日本女性の一般的なライフコース：「再就職型」
再就職後の主たる就業形態：パートタイム

+

非正規化は年々拡大し、若年層でも増加

- ・一方、「ワーク・ライフ・バランス論」は、そもそも少子化対策を背景に登場したことから、主たる対象者は「継続就労者」。

↓

- ・「ワーク・ライフ・バランス」の議論からもれてしまう層が増加か？
(松田2010、鈴木2010)

<本研究の目指すもの>

- ①NFRJからこの10年間の既婚女性の就業状況を辿る
- ②労働市場の変化を踏まえ、正規だけでなく非正規の既婚女性をワーク・ライフ・バランスの議論の俎上に載せる

<NFRJ98、03、08のデータのもつ意義>

- ・労働市場が大きく変化したこの10年間に調査を実施。
08は「世界的不況」が起こった後に収集されたデータ。
- ・「ワーク・ライフ・バランス」という言葉の
登場前(NFRJ98)と登場後(08)のデータ。



10年間の就業状況の変化および既婚女性のワーク・ライフ・バランスの実態を捉えることにより、社会・経済的变化が家族に及ぼす影響をみることが可能に。

2. 先行研究と本研究の方法

<既婚女性の就業に関する研究：2つの流れ>

- ①誰がフルタイム／パートタイムで働き、誰が専業主婦でいるのか？
その属性を明らかにする。
→主として階層論や労働経済学における蓄積
(中井2009、平尾2005、大和2005、四方・馬2005、四方2005など)
- ②誰の負担感が大きいのか？その規定要因を明らかにする。
(家庭生活の負担感やディストレスに着目)
→主としてストレス研究における蓄積
(稲葉1999a、1999b、西村2009、など)



いずれも「専業主婦」「常勤(正規)」「パート(非正規)」「自営・自由」などの「就業形態」を用いて分析したもの。

BUT この10年間の就業状況の変化を考慮する必要は？

⇒「労働時間」に着目

◆本研究の方法

「労働時間」と「就労形態」と組み合わせて
4つの就業パターンを作成し、それぞれの
就業パターンの特徴を探索的に描き出す。

3. 分析1:NFRJからみた10年間の変化

3.1 就業形態の変化 —3時点比較 98、03、08—

①使用するデータ

NFRJ98、03、08の3時点のデータ

対象は28~47歳の既婚女性

(対象者数:98:1,150人、03:1,118人、08:836人)

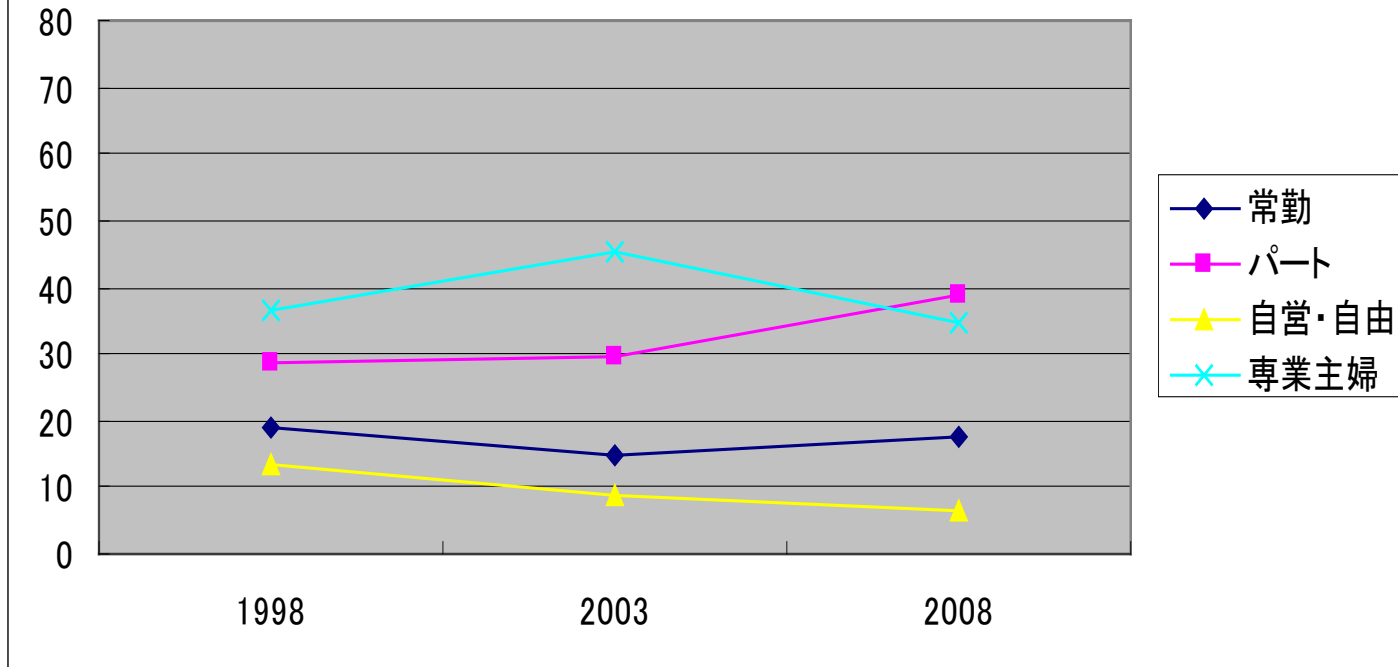
②全体的な傾向

現在の就業形態を以下の4つに分類

「常勤」「パート」「自営・自由」「専業主婦」

(「経営者・役員」を除く)

3時点比較 28~47歳女性の就業率(全体)

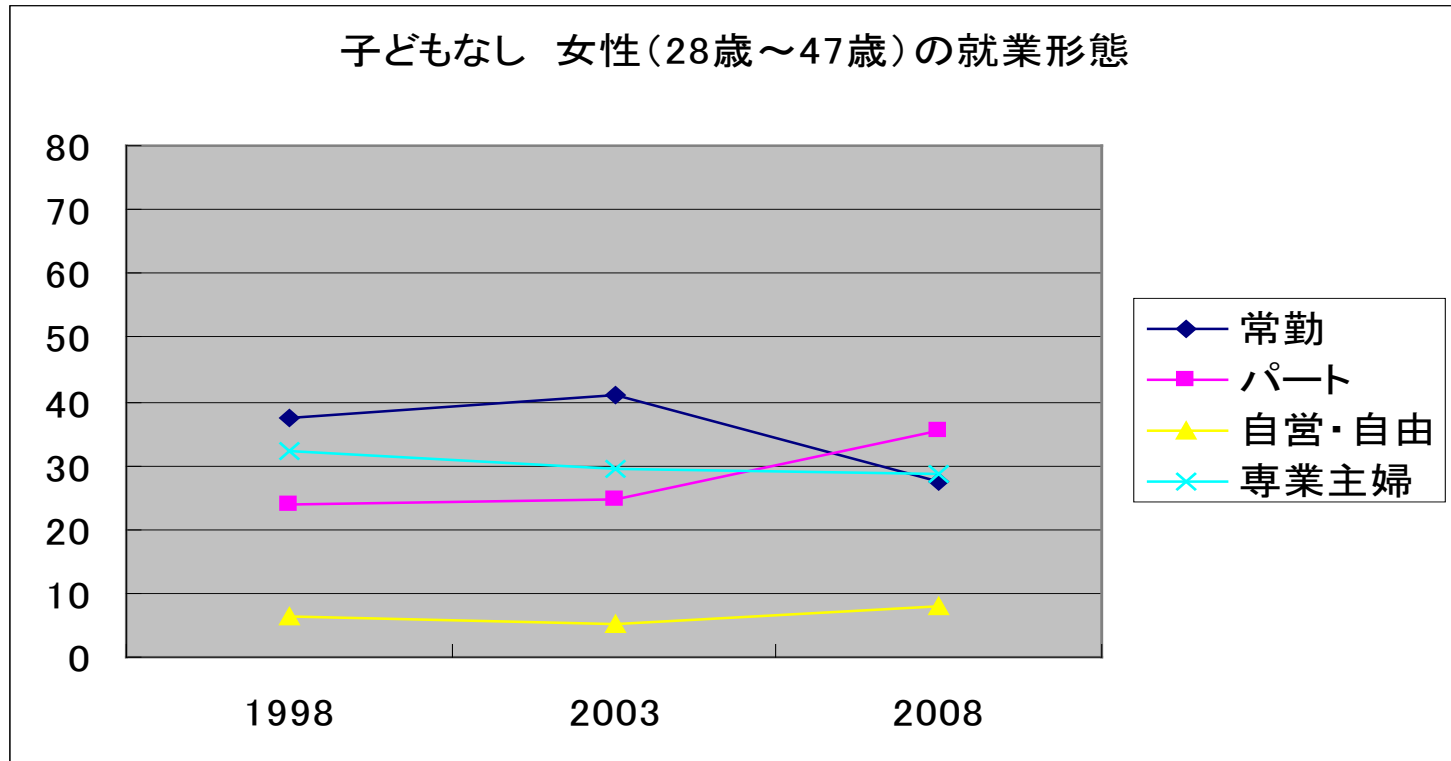


⇒ 全体的な傾向としては既婚女性のパートタイム化が進行か？

③ライフステージ別

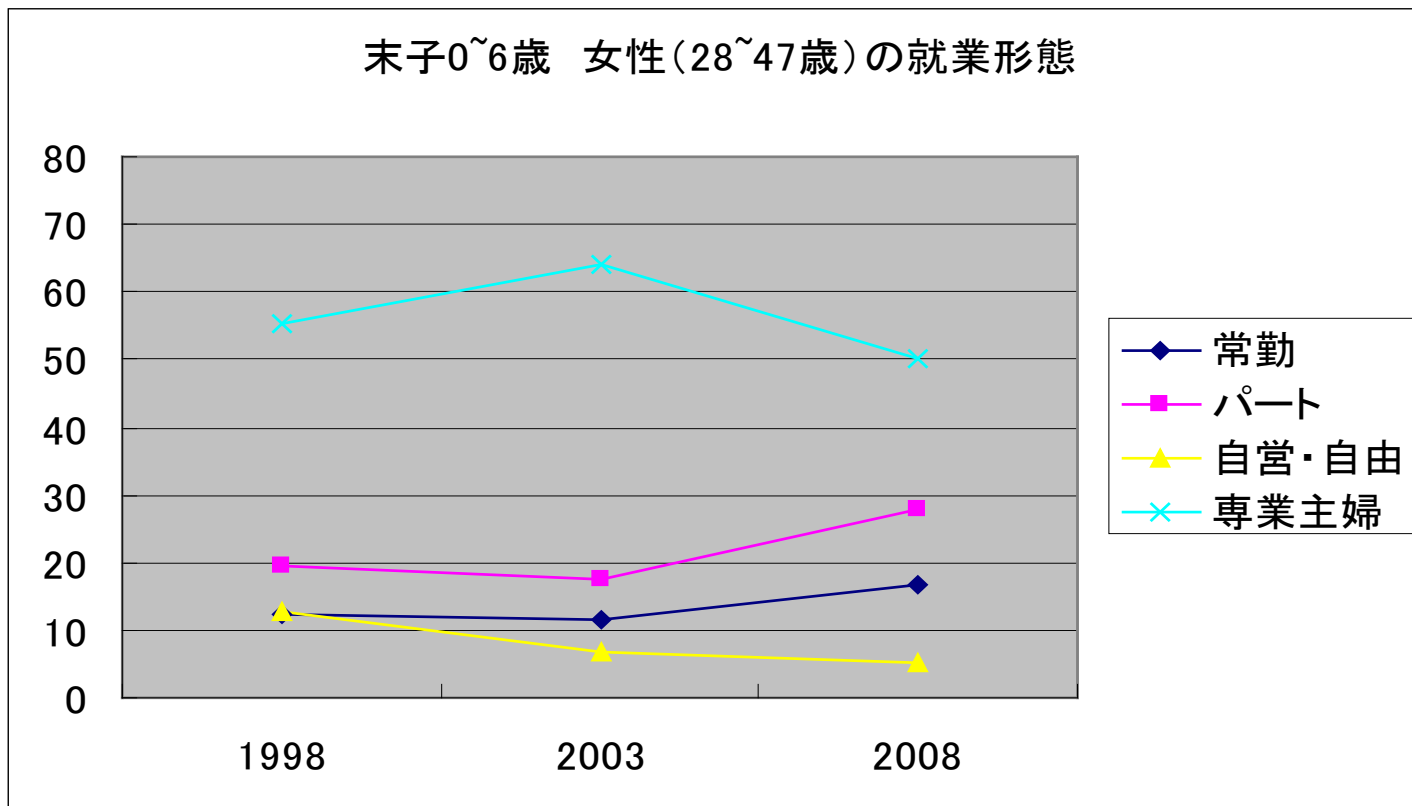
— <子どもなし><末子0~6歳><末子7~12歳><末子13~19歳>—

<子どもなし>



⇒「子どものいない間はフルタイム」に変化か？

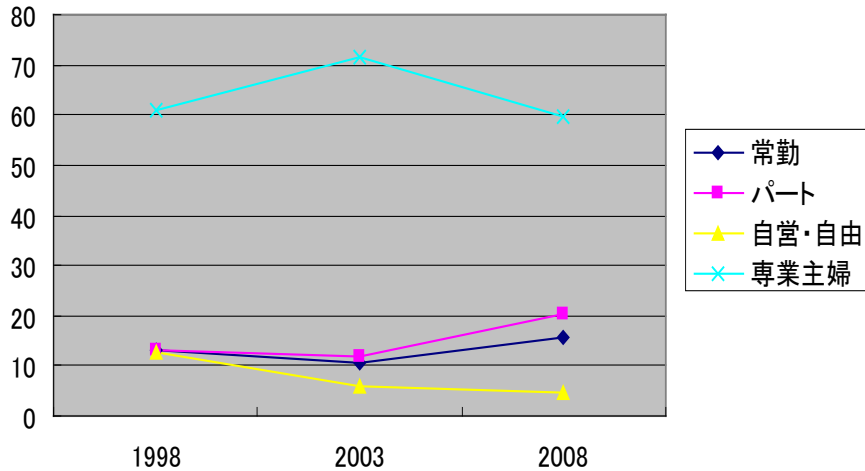
<末子0~6歳>



⇒変動が大きかったため、「末子0~3歳」と「末子4~6歳」に分割。

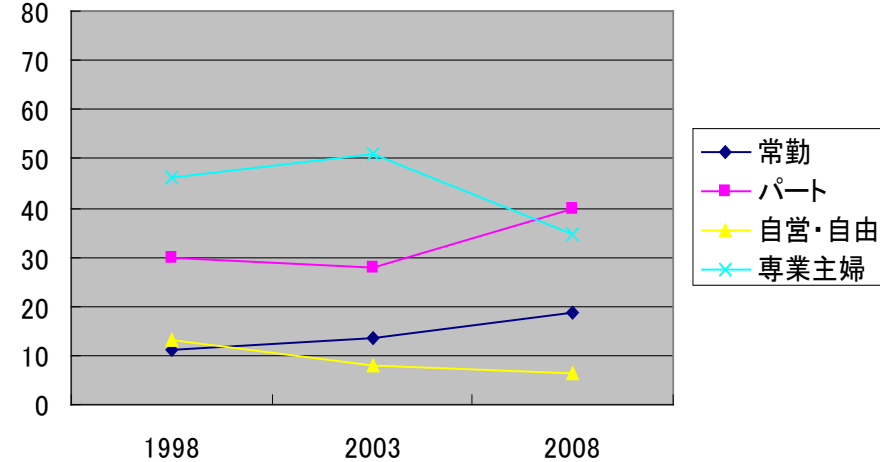
<末子0~3歳>

末子0~3歳 女性(28~47歳)の就業形態



<末子4~6歳>

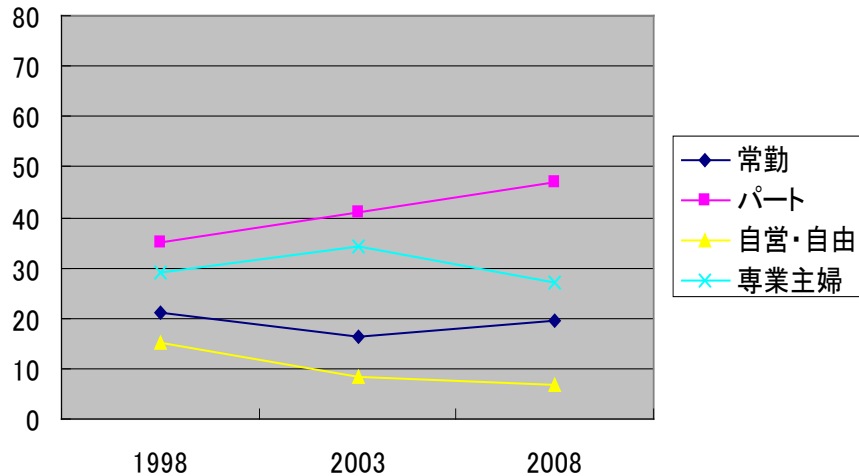
末子4~6歳 女性(28~47歳)の就業形態



⇒末子4~6歳で大きな変化。2008年では「パート」が専業主婦を上回る。

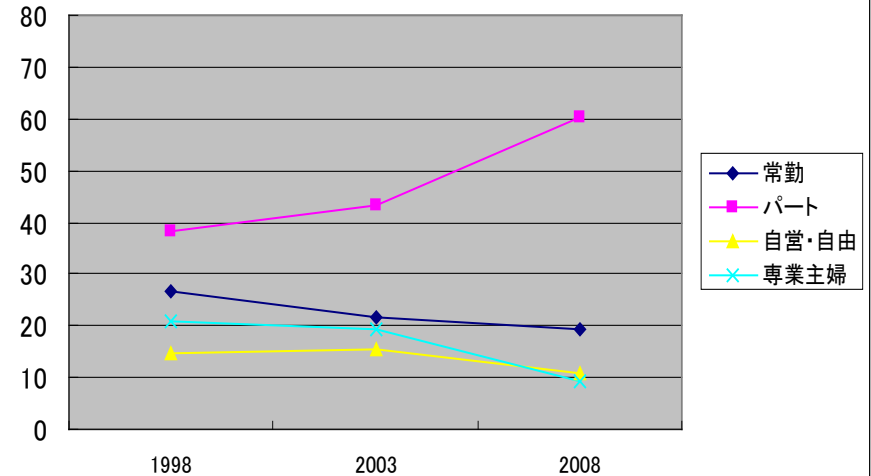
<末子7~12歳>

末子7~12歳 女性(28~47歳)の就業形態



<末子13~19歳>

末子13~19歳 女性(28~47歳)の就業形態



⇒「末子7~12歳」「末子13~19歳」とも、08で「パート」が急増。

⇒「非正規雇用」の量的増大が全ステージで進行。

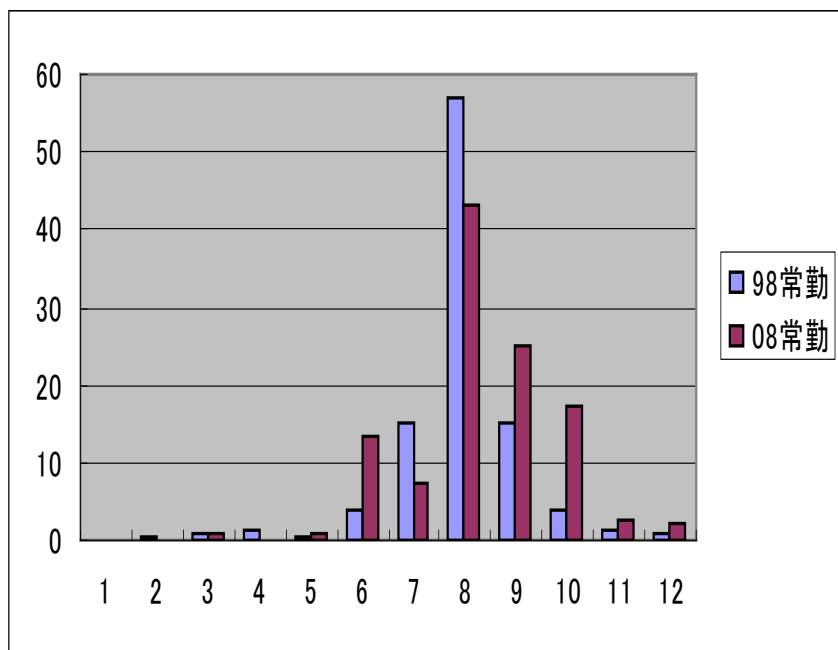
既婚女性のパート化のさらなる進展。

⇒末子年齢が低い時期において就業する既婚女性の増加。

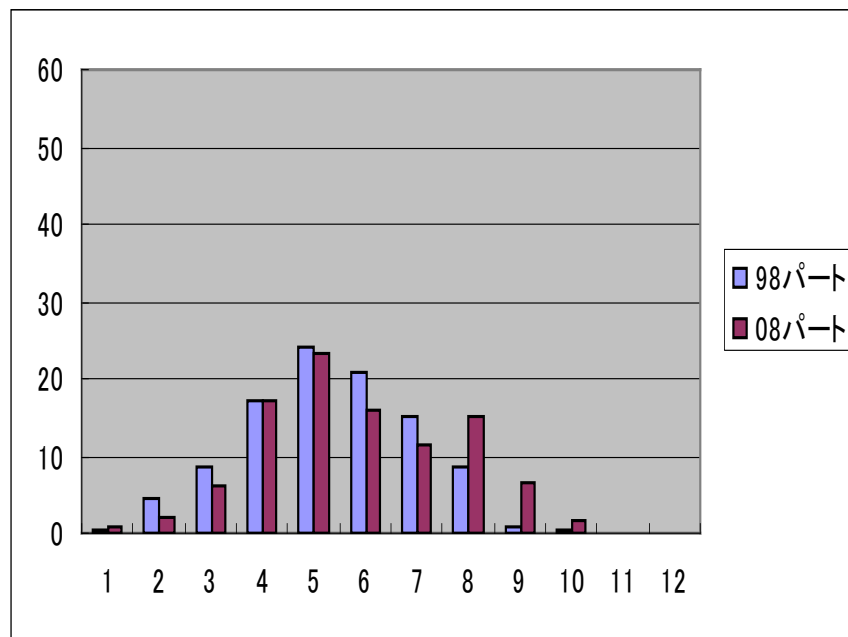
3.2 労働時間の変化：－2時点比較 98と08－

①「常勤」「パート」の労働時間は変化したのか？

<常勤>

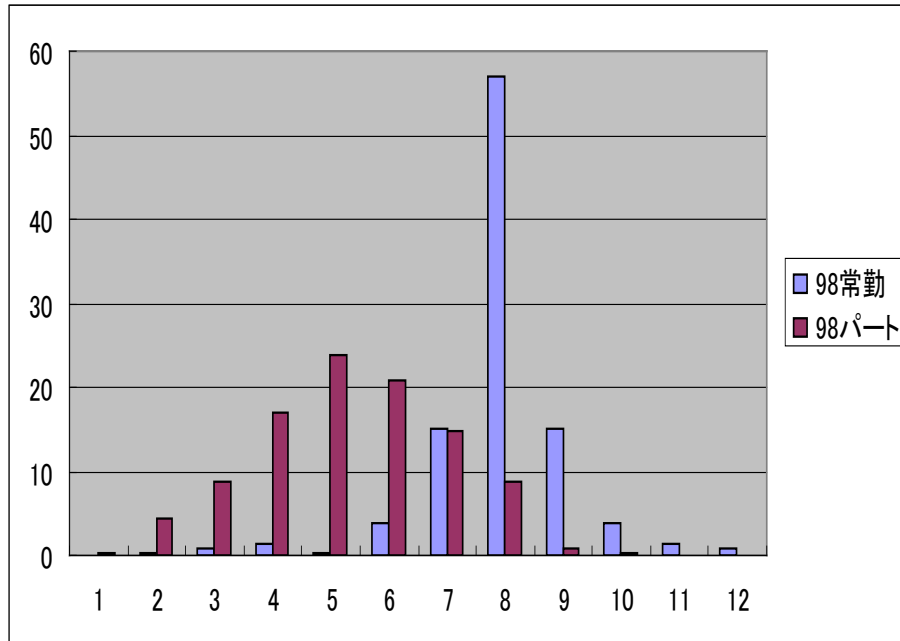


<パート>

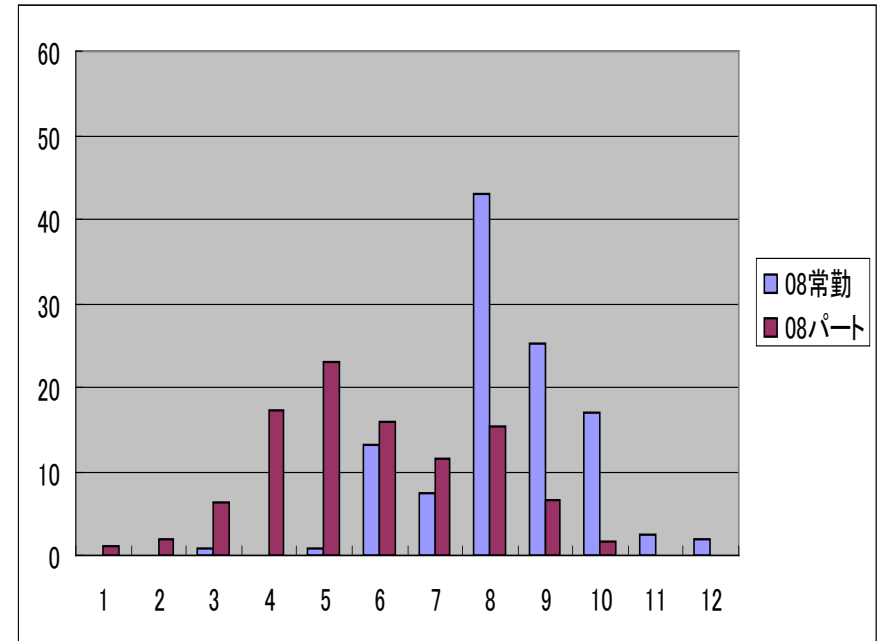


・「常勤」「パート」とともに「労働時間の二極化」が進行

<98>



<08>



・98と比べると、08では常勤とパートの垣根が曖昧になる傾向

⇒「常勤」「パート」とひとくくりにはできない状況が生じている可能性

3.3 就業パターン(4類型)の作成

- ・就業形態を「1週間の労働時間」の長短で分ける。

「常勤」→「45時間未満」と「45時間以上」
「パート」→「35時間未満」と「35時間以上」



「常勤」か「パート」の二者択一ではなく、
4つの就業パターン(就業類型)で把握

	08	98
「通常常勤」(45h/w未満) :	86人(15.4% ← 24.7%)	
「長時間常勤」(45h/w以上) :	104人(18.6% ← 16.3%)	
「通常パート」(35h/w未満) :	278人(49.6% ← 47.5%)	
「長時間パート」(35h/w以上) :	92人(16.4% ← 11.5%)	
	計560人	計655人

注)対象は末子年齢が0~19歳(含む「子どもなし」)の既婚女性

4. 分析2: 既婚女性とワーク・ライフ・バランス

4.1 属性変数からみた就業パターンの特徴

◆就業パターンの属性的な特徴をクロス表分析で確認

対象: 末子年齢が0~19歳(含む「子どもなし」)までの既婚女性

◇独立変数(行): ライフステージ、年齢(出生コーホート)、
本人学歴、夫学歴、夫婦学歴組合せ、
本人仕事の種類、夫年収、世帯年収、
実母居住地、義母居住地、都市度など

◇従属変数(列): 就業パターン(4類型)

<分析結果>

・ライフステージ、本人学歴、夫婦学歴組合せ、夫年収、世帯年収、
本人仕事の種類、実母居住地が有意に。

図表－1 就業パターンと属性変数のクロス表分析

	通常常勤	長時間常勤	通常パート	長時間パート	合 計
ライフステージ $\chi^2=47.607^{**}$					
子どもなし	17.1%	30.0%	32.9%	20.0%	70 人
末子 0～3 歳	35.1%	8.1%	41.9%	14.9%	74 人
末子 4～6 歳	13.9%	19.0%	51.9%	15.2%	79 人
末子 7～12 歳	9.8%	19.0%	60.1%	11.0%	163 人
末子 13～19 歳	12.1%	17.8%	48.9%	21.3%	174 人
	(15.4%)	(18.6%)	(49.6%)	(16.4%)	557 人
<参考>					
年齢（出生コーホート） n.s.					
53～62 歳（1946－55）	22.2%	11.1%	44.4%	22.2%	18 人
43～52 歳（1956－65）	11.4%	22.4%	50.9%	15.4%	228 人
33～42 歳（1966－75）	15.1%	17.6%	50.8%	16.4%	238 人
28～32 歳（1976－80）	26.3%	11.8%	43.4%	18.4%	76 人
	(15.4%)	(18.6%)	(49.6%)	(16.4%)	560 人

		通常常勤	長時間常勤	通常パート	長時間パート	合 計
本人学歴	$\chi^2=21.552^{**}$					
中・高卒		15.1%	12.8%	52.1%	20.0%	265 人
専門・短大卒		14.7%	20.3%	51.2%	13.8%	217 人
大学・大学院卒		18.7%	33.3%	36.0%	12.0%	75 人
		(15.4%)	(18.5%)	(49.6%)	(16.5%)	557 人
夫年収	$\chi^2=10.317^*$					
600 万円未満		16.8%	17.6%	46.0%	19.6%	363 人
600 万円以上		13.1%	19.6%	57.1%	10.1%	168 人
		(15.6%)	(18.3%)	(49.5%)	(16.6%)	1244 人
世帯年収	$\chi^2=62.143^{**}$					
500 万円未満		8.5%	4.7%	62.8%	24.0%	129 人
500～800 万円未満		13.3%	13.8%	55.9%	17.0%	188 人
800 万円以上		20.6%	31.7%	36.5%	11.1%	189 人
		(14.8%)	(18.2%)	(50.4%)	(16.6%)	506 人

	通常常勤	長時間常勤	通常パート	長時間パート	合計
本人仕事の種類 $\chi^2=92.597^{**}$					
専門・管理	18.9%	43.2%	28.8%	9.0%	111?
事務・営業系	21.5%	18.8%	40.3%	19.3%	217?
販売・サービス、技能・労務系	9.7%	8.2%	64.6%	17.5%	268?
	(15.4%)	(18.6%)	(49.6%)	(16.4%)	560?
実母の居住地 $\chi^2=18.104^{**}$					
同居・隣居	12.9%	27.4?	38.7%	21.0%	62?
近居 (片道1時間以内)	17.4%	18.9%	52.3%	11.4%	281?
遠居 (片道1時間以上)	12.7%	14.7%	51.3%	21.3%	150?
	(15.4%)	(18.7%)	(50.3%)	(15.6%)	493?

4.2 「生活満足度」と「仕事と家庭の軋轢」 からみたワーク・ライフ・バランス

◆本研究における「ワーク・ライフ・バランス」の捉え方

「仕事と家庭の軋轢が少なく、生活にも大体満足している状態」

→ 「生活満足度」と「仕事と家庭の軋轢」を2軸にして捉える。

<変数>

★「生活満足度」: 数値が高いほど「満足度」が高くなるようリコード

「4. かなり満足」「3. どちらかのいえば満足」「どちらかといえば不満」「かなり不満」

★「仕事と家庭の軋轢」: 数値が高いほど軋轢が高くなるようリコード

「4. あてはまる」「3. まああてはまる」「2. あまりあてはまらない」「1. ほとんどあてはまらない」

→以下の4項目から合成尺度を作成($\alpha=.752$) 4~16点

- ・仕事が原因で家族と一緒に過ごす時間が十分とれないでいる。
- ・家にいても仕事のことが気になってしかたがないことがある。
- ・家族のあれやこれやで思うように仕事に時間を配分できない。
- ・家事や育児で疲れてしまい、仕事をやろうという気にならない。

Q. 就業パターンによって「生活満足度」と「仕事と家庭の軋轢」に差があるか？ ライフステージ別に確認してみる。

<分析結果>

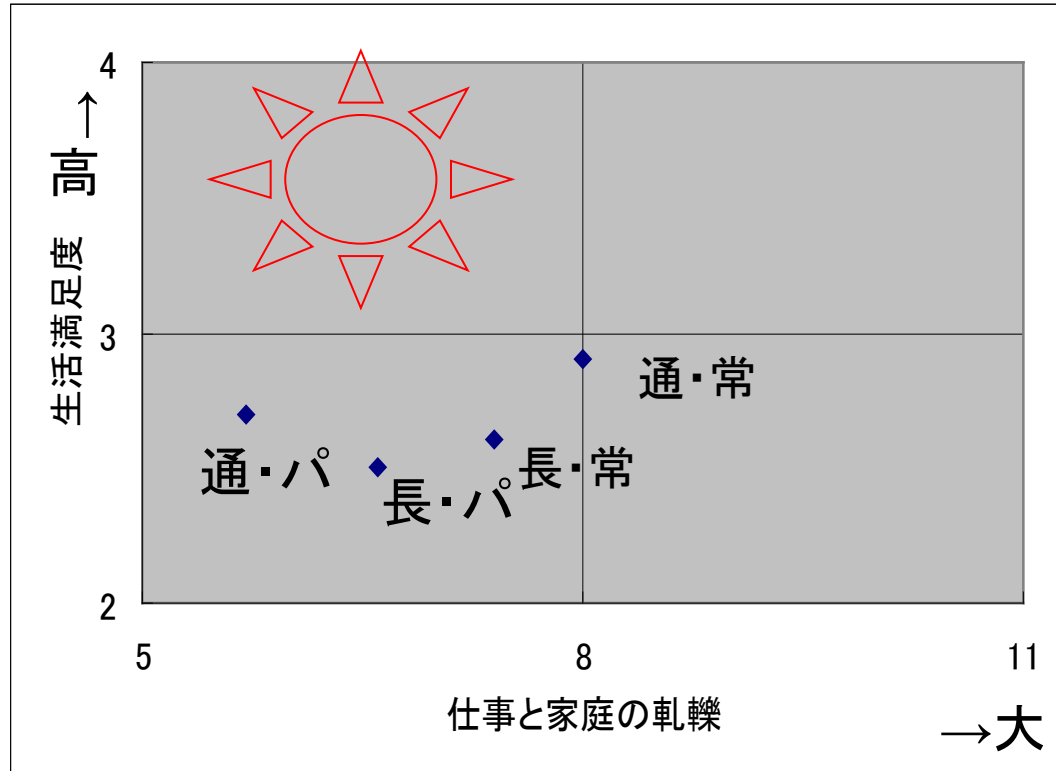
- ・「生活満足度」は「末子0~6歳」「末子7~12歳」で有意に。
- ・「仕事と家庭の軋轢」はすべてのライフステージで有意に。

図表2 「生活満足度」「仕事と家庭の軋轢」と就業パターンの一元配置の分散分析の結果

	子ども なし	末子 0~6歳	末子 7~12歳	末子 13~19歳
生活満足度**	n.s.	10%	5%	n.s.
仕事と家庭の軋轢**	5%	1%	1%	1%

⇒「生活満足度」と「仕事と家庭の軋轢」の関係を見るため、各就業パターンをプロットしてみる。

図表3 「生活満足度」と「仕事と家庭の軋轢」
 <全体>

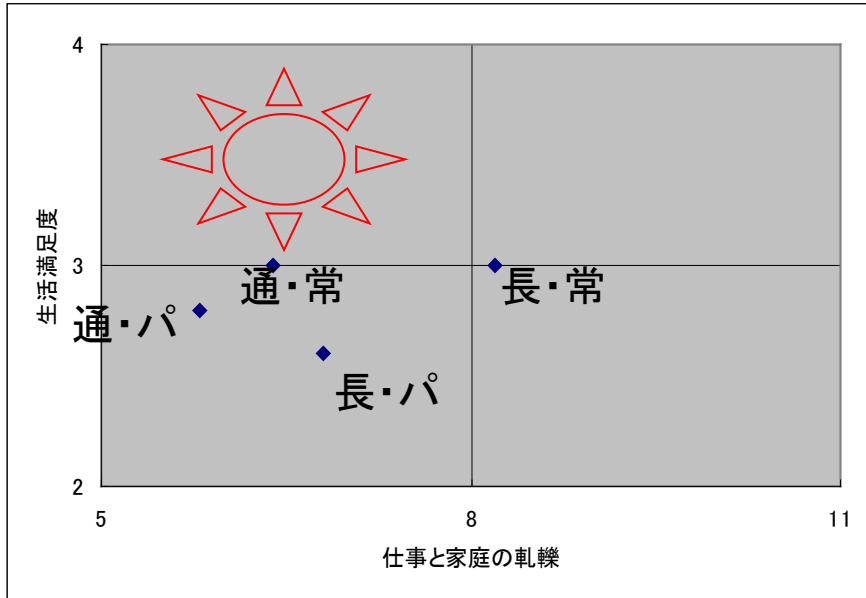


以下、「通・常」:通常常勤、「長・常」:長時間常勤、
 「通・パ」:通常パート、「長・パ」:長時間パート

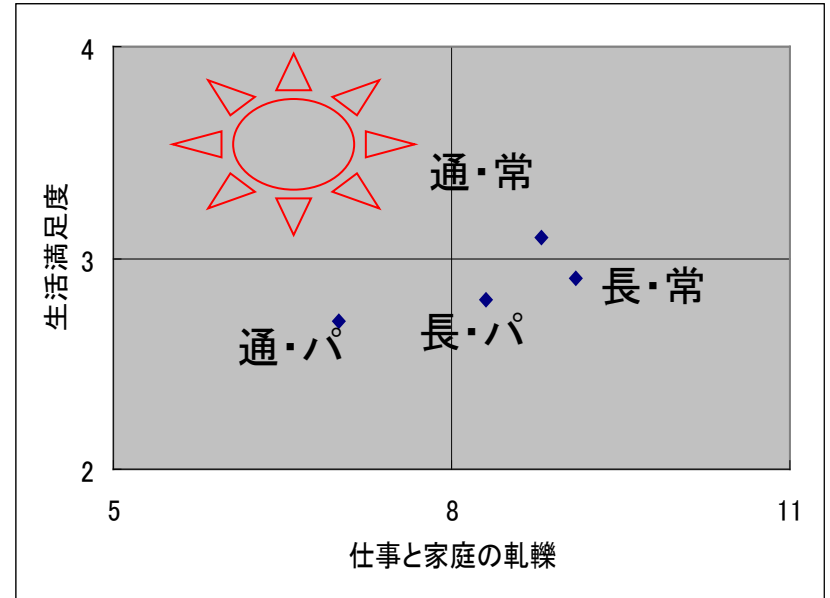
 :「仕事と家庭の軋轢」が低く、「生活満足度」が高い状態
 (=ワーク・ライフ・バランスが達成されている状態)

を示す

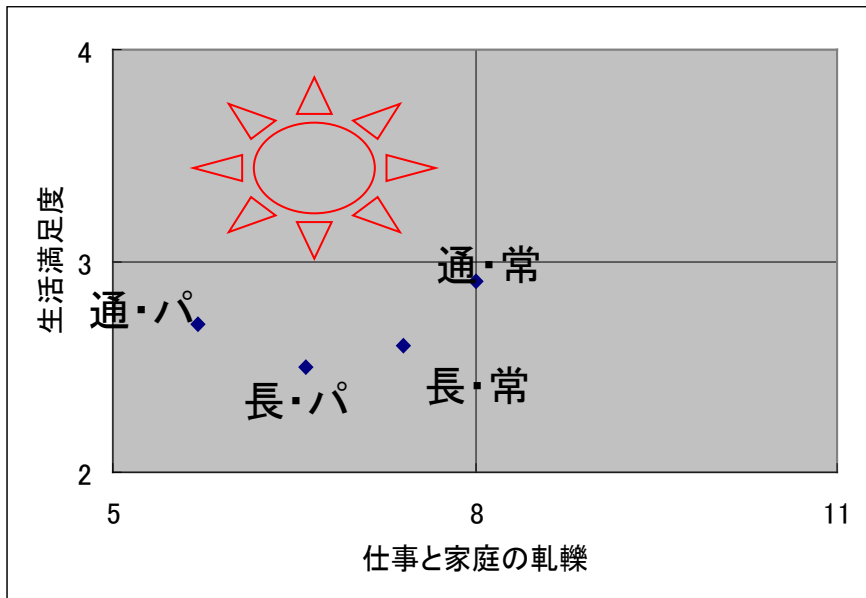
<子どもなし>



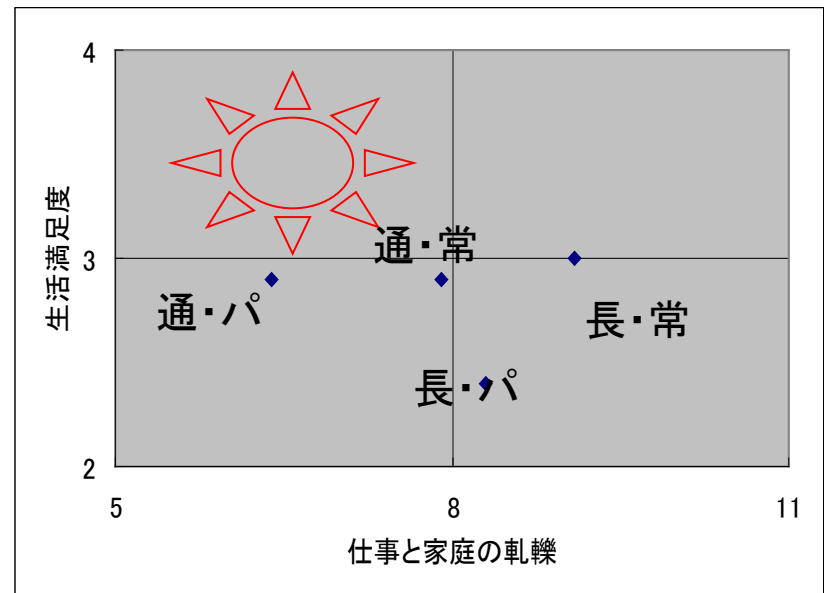
<末子0~6歳>



<末子13~19歳>



<末子7~12歳>



●ライフステージごとに、直面する問題状況が異なる可能性。

→特に、「仕事と家庭の軋轢が高い」象限にプロットが多い
「末子0~6歳」と「末子7~12歳」に着目すると、

<末子0~6歳>

★「通常常勤」「長時間常勤」:「仕事と家庭の軋轢」は大きく、「生活満足度」は高め

★「通常パート」:「仕事と家庭の軋轢」は小さく、「生活満足感」は低い

★「長時間パート」:「仕事と家庭の軋轢」もそれなりに大きく、
「生活満足度」はそれほど高くない

<末子7~12歳>

★「通常常勤」「長時間常勤」:「仕事と家庭の軋轢」は大きく、「生活満足度」は高め

★「通常パート」:「仕事と家庭の軋轢」は小さく、「生活満足度」は高め
(ワーク・ライフ・バランスが実現?)

★「長時間パート」:「仕事と家庭の軋轢」は大きく、「生活満足感」は低い



Q. 就業パターンを構成しているのは、どのような人たちなのか?

4.3 本人・夫の仕事の状況や夫婦関係からみた 就業パターンの特徴

◆就業パターンによって以下の項目に差があるのかどうかを、一元配置の分散分析で確認。

◇独立変数:就業パターン4類型

◇従属変数:

①本人と夫の仕事の状況(労働時間と収入)

本人と夫の1週間の労働時間とそれぞれの年収

②家計の状況とそれに対する意識

世帯収入

「家計の先行きについて不安を感じたこと」(数値が高いほうが「不安」)

「4. 何度もあった」~「1. まったくなかった」

③家庭生活

実態:夫の子育てへのかかわり方

「子どもと遊ぶ」「子どもの身の回りの世話」の頻度(週あたり)

夫からの情緒的サポートの有無:3項目の合成尺度(3~12点) $\alpha = .867$

意識:夫婦関係満足度(数値が高いほうが「満足」)

「4. かなり満足」~「1. かなり不満」

図表4 就業パターンと本人・夫の就業、家庭生活に関する分散分析
 <末子0~6歳>

	通常常勤	長時間常勤	通常パート	長時間パート	平均	サンプル数	
本人・1週間の労働時間	40.0	49.0	19.4	41.4	31.8	153	**
夫1週間の労働時間	51.4	55.7	54.7	58.2	54.7	149	
本人年収(万円)	339.3	402.6	58.7	133.3	180.0	149	**
夫収入	480.1	472.2	474.8	368.9	459.2	147	
世帯収入	831.1	872.2	560.4	565.7	662.0	139	**
家計の先行き不安	2.3	2.5	2.9	2.8	2.7	153	+
夫の子育て(遊ぶ)日/週	3.9	3.4	3.1	3.1	3.2	151	
夫の子育て(世話)	3.4	3.0	2.3	3.3	2.8	150	+
夫婦関係満足度	3.0	3.1	2.9	3.1	3.0	148	

注1)**は1%、*は1%、+は10%水準で有意な値を示す。

図表5 就業パターンと本人・夫の就業、家庭生活に関する分散分析
 <末子7~12歳>

	通常常勤	長時間常勤	通常パート	長時間パート	平均	サンプル数	
本人・1週間の労働時間	38.7	50.3	20.6	43.5	30.5	163	**
夫1週間の労働時間	48.4	57.4	54.9	53.7	54.6	158	
本人年収(万円)	431.2	444.8	77.6	113.2	183.3	160	**
夫収入	554.4	548.8	541.4	340.0	521.8	153	**
世帯収入	936.7	978.0	648.1	478.2	714.4	146	**
家計の先行き不安	2.1	2.3	2.7	3.2	2.6	163	*
夫の子育て(遊ぶ)日/週	1.9	2.4	1.6	1.6	1.8	143	
夫の子育て(世話)	2.6	2.0	1.1	1.5	1.5	143	*
夫婦関係満足度	2.9	3.1	2.7	2.4	2.8	157	*

注1)**は1%、*は1%、+は10%水準で有意な値を示す。

5. まとめと考察

5.1 各就業パターンの特徴

「通常常勤」「長時間常勤」

<末子0~6歳> <「末子7~12歳」>

両方のライフステージとも、本人収入、世帯年収が高く、家計に対する先行き不安は少ない。夫が子どもの世話をする頻度が高く、夫婦関係満足度も高い。仕事と家庭の軋轢は大きいですが、生活全般に対する満足度は比較的高い。

「通常パート」

<末子0~6歳>

短時間勤務で「仕事と家庭の軋轢」は少ないが、夫の子育て分担度は低く（特に世話）、世帯収入も少ない。家計の先行きに不安をもち、生活満足度も低い。

<末子7~12歳>

「仕事と家庭の軋轢」は相変わらず低いまま、生活全般に対して、「通常常勤」や「長時間常勤」と同程度の満足度を示す。夫の子育て分担度は相変わらず²⁸低いですが、夫婦関係に対しても「長時間パート」よりは満足している。

「長時間パート」

＜末子0~6歳＞

労働時間が長く、「仕事と家庭」の軋轢は「通常パート」に比べると高い。自分が長時間働くことで、世帯収入を維持しているが、労働時間の割には「常勤」に比べて収入が低く、「通常常勤」の4割程度である。家計への不安も高め。しかし、生活全般についての満足感は他の就業パターンと差はない。

＜末子7~12歳＞

夫年収、世帯年収ともに最も低く、家計への不安も最も高い。本人の労働時間は「通常常勤」と変わらないが、本人年収は4分の1程度である。

4つの就業パターンの中で、夫婦関係、生活全般への満足度が最も低く、いずれも「長時間常勤」との差が大きい。

5.2 考察

- ◆「就業形態」と「労働時間」を組み合わせた就業パターンからみえてきた既婚女性のワーク・ライフ・バランスの状況

<支援を講じる際に留意すべきこと>

①ライフステージの絞込み

仕事と家族の両立のための支援策が特に必要とされるのは「末子0～6歳」(未就学児)と「末子7～12歳」(小学生)。

②増加する非正規雇用者への対応

現状の「ワーク・ライフ・バランス」論の対象は主に正規雇用者。
→末子年齢が低い時期において就業している女性の急増。
正規・非正規の格差はライフステージの進展に伴い増幅。

③それぞれの就業類型とワーク・ライフ・バランス

どのような状況を「ワーク・ライフ・バランスを実現している」と捉えるのか？

謝辞

第3回全国家族調査(NFRJ08)データの使用にあたっては、日本家族社会学会全国家族調査委員会の許可を得た。

また、二次分析にあたり、東京大学社会科学研究所附属日本社会情報センターSSJデータアーカイブから「第1回全国家族調査」(NFRJ98)および「第2回全国家族調査」(NFRJ03)(日本家族社会学会全国家族調査委員会)の個票データの提供を受けた。

参考文献

- 樋口義雄, 2008, 「経済学から見た労働市場の二極化と政府の役割」『日本労働研究雑誌』No571.
———, 「法と経済学の視点から見た労働市場制度改革」鶴光太郎・樋口義雄・水町勇一郎編著『労働市場制度改革—日本の働き方をいかに変えるか』日本評論社.
- 平尾桂子, 2005, 「女性の学歴と再就職——結婚・出産退職後の労働市場再参入過程のハザード分析」『家族社会学研究』17(1): 34-43.
- 稲葉昭英, 1999a, 「家庭生活・職業生活・育児——育児と役割ストレインの構造」, 石原邦雄編『妻たちのストレスとサポート研究——家族・職業・ネットワーク』東京都立大学都市研究所, 29-52.
———, 1999b, 「有配偶女性のディストレスの構造——大都市近郊」(石原編 1999: 87-119).
- 松田茂樹, 2010, 「非正規雇用者のワーク・ライフ・バランス」『Life Design Report (Winter 2010.1.)』, 28-35.
- 中井美樹, 2009, 「就業機会, 職場権限へのアクセスとジェンダー」『社会学評論』59(4): 699-714.
- 西村純子, 2009, 『ポスト育児期の女性と働き方』慶應義塾大学出版会.
- 汐見稔幸・佐藤博樹・大日向雅美・小宮信夫・山縣文治監修(編集代表: 佐藤博樹), 2008, 『ワーク・ライフ・バランス』ぎょうせい.
- 総務省統計局, 2008, 『平成19年度就業構造基本調査 結果の概要』.
- 鈴木富美子, 2010, 「既婚パート女性とワーク・ライフ・バランス」東京大学社会科学研究所『雇用システムの現状と課題』SSJリサーチペーパーシリーズ』44号: 40-60.
- 鈴木奈穂美, 2008, 「ワーク・ライフ・バランス施策の新展開」『愛国学園大学人間文化研究紀要』第10号: 45-53.
- 山口一男・樋口美雄, 2008, 『論争 日本のワーク・ライフ・バランス』日本経済新聞出版社.
- 大和礼子, 2005, 「女性は職業経歴と家族経歴をどう調整してきたか? ——子育て後に再就職するか家庭に留まるかをめぐって」『社会学部紀要』関西大学37(1): 57-78.
- 四方理人・馬欣欣, 2005, 「90年代における両立支援施策は有配偶女性の就業を促進したか」『KUMQRP DISCUSSION PAPER SERIES』DP2005-027 Keio University.
- 四方理人, 2005, 「日本における有配偶女性の離職と再就職」『KUMQRP DISCUSSION PAPER SERIES』DP2005-029 Keio University.